全国草原再生ネットワーク

ニュースレター vol.24 （Oct. 2015）

全国草原サミット・シンポジウム会場になる上山高原（兵庫県美方郡新温泉町／高橋佳孝氏撮影）

第 11 回全国草原サミット・シンポジウムについて

第 11 回の全国草原サミット・シンポジウムが、来年の秋、兵庫県美方郡新温泉町で開催されることは、以前のニュースレターでもお知らせしました。

その後、7 月には実行委員会（会長：岡本英樹町長）が設立されました。8 月に開かれた第 2 回の会合で、開催の日程が正式に決まりました。

新温泉町は、兵庫県の北西部に位置し、北は日本海、西は鳥取県、南・東は香美町に接しています。内陸部は 1,000 メートル級の山々に囲まれ、山陰海岸国立公園をはじめ自然公園指定区域が 46%を占める自然豊かな山間地域です。平成 22 年には山陰海岸ジオパークとして世界認定されるなど貴重な地質遺産も有しています。

現在決まっている日程などは以下のとおりです。初日には、ススキ草原を有する上山高原の現地見学会、2 日目にはシンポジウムと分科会、最終日は首長による草原サミットが予定されています。シンポジウムや分科会などの内容は、今後の実行委員会などで検討されるとのことです。

上山高原は、鳥取県にまたがる「氷ノ山・那岐山国定公園」内にあり、標高 800～900 メートルの間にススキの草原やブナ林などが広がっています。冬期には 3 メートルを超える積雪があり大変厳しい自然環境ながら、春の山焼き風景や秋のススキ一面の草原は地域の風物詩でもあります。

サミット・シンポジウムの開催に先立ち、今年の 10 月 18 日には、NPO 法人上山高原エコミュージアムが開催した「秋のエコフェスタ」で、プレイベントと位置づけられた、サミット・シンポジウムの紹介が行われました。この様子は、次号のニュースレターで紹介する予定です。

近畿地方では初めての全国草原サミット・シンポジウムになります。全国草原再生ネットワークでも、随時情報の提供をしていく予定です。多くの方が参加し、実りのある場になるよう、みなさまのご協力をお願いします。

（ネットワーク事務局）

期　日：2016 年 10 月 15 日～17 日
場　所：兵庫県美方郡新温泉町
　　夢ホール・町民センター・上山高原など
主な内容（予定）
10 月 15 日　上山高原の現地見学会
10 月 16 日　全国草原シンポジウム
　　（新温泉町夢ホール）
　　分科会（新温泉町町民センター）
10 月 17 日　全国草原サミット（湯村温泉内）

秋の上山高原（秋のエコフェスタ散策時）

上山高原の山焼きの様子（三浦豊彦氏撮影）

全国草原再生ネットワークではヒヤリ･ハット集をまとめています
あなたのまわりで起きた火入れ・草刈のヒヤリ・ハットの情報をお寄せ下さい
詳しくはホームページ（http://sogen-net.jp/about/jigyou/hiyari/）まで

各地からの報告

安比高原シバ草原の自然再生について

（渋谷晃太郎：岩手県在住）

1　安比高原のシバ草原について

安比高原は、岩手県北西部、標高約 900m に位置する高原で、APPI 高原スキー場があることから全国的に知られていますが、スキー場の北西側に隣接して美しいブナ二次林やシバ草原が広がっていることは、あまり知られていません。このブナ二次林やシバ草原は、主に江戸時代より、牛馬の放牧や、浄法寺漆器の木地材、薪炭生産の場として地域住民に利用されることで、その景観が維持されてきたといわれていますが、高度経済成長期以降、牛馬の放牧が減ったことでシバ草原は遷移が進み、かつての景観は徐々に失われつつあります。

写真 1　奥のまきば　深さの異なる池がいくつもあり、湧水で涵養されています。池の周辺以外は森林化しています。

一番奥に位置する「奥のまきば」の大半は、シラカンバなどにより森林化しつつあり、湧水による池の周辺など一部が管理によりかろうじて草原が維持され、ミズゴケ湿原、ミズギクなどの湿性草本や、ヤナギラン、リンドウなどの乾性草本がモザイク状に分布しています（写真 1)。「中のまきば」には、駐車場やブナの駅と呼ばれる管理施設があり、管理密度が高く、レンゲツツジが多いシバ草原となっていますが、周辺からシラカンバなどが侵入し、侵食されつつあります（写真 2)。これら草原の周辺には、放牧との関連が深いといわれるブナの二次林が広がっていて全体として美しい景観を形成しています（写真 3)。

写真 2　中のまきば　シバ草原の中にレンゲツツジ、ズミなどの株があります。奥は APPI 高原スキー場です。

2　シバ草原の再生の試み

シバ草原の再生は、平成 18 年度から始まりました。はじめは土地所有者の国有林と八幡平市、地域住民で組織された活動推進協議会によって、シバ草原を覆うササやズミの刈払いや野焼きが年 3 回程度（春：約 1～2 日、夏約 1～2 日、秋：約 1 週間）行われてきましたが、平成 24 年からは民間ボランティア団体「安比高原ふるさと倶楽部」が設立され、保全活動の主体は市民へと移行しています。「安比高原ふるさと倶楽部」は、地域住民やペンション、ホテル関係者が自主的に組織した民間団体で、季節毎に草原の刈払い・野焼きを行うほか、自然歩道の維持整備を行っています。また平成 26 年度からは、「中のまきば」の一部に馬を放牧してシバ草原を復元・保全する試みを行っています。

3　今後の取組

安比高原のシバ草原については、これまでほとんど学術的な調査が行われてきませんでした。このため、全国的な観点から

の草原の価値が明らかではなく、管理目標もはっきりしないことから、計画的な管理が行われてきませんでした。このため、今年度から岩手県立大学が参画し、草原の現状を明らかにするための植生調査を開始しました。また、調査結果をもとに管理の目標を定め、順応的な管理を行うための計画を策定することとしています。また、岩手県北部地域は、南部駒の産地として豊かな馬文化が花開いていましたが。現在ほとんど馬は見られなくなりました。安比のシバ草原の管理に当たっては、「南部駒」に草原の再生という新たな仕事を与えることで、馬文化を維持しつつ自然再生を図るという 2 つの目的を達成することを目指しています。

写真 3　安比高原を代表するブナの二次林です。草原に隣接して成立しています。

草原の中のクロスカントリーコースに群生するアイナエ（横川昌史：京都府在住）

島根県の三瓶山西の原のクロスカントリーコースでアイナエ（マチン科）がたくさん生育しているのを見つけました（写真 1, 2）。アイナエは日当たりのよい暖地の低湿地に生えるとされる一年草ですが、湿地でなくても放牧地や低く刈り込まれた草地など、草丈の低い湿った草原に生育します。アイナエは、とても丈の短い植物で、高くても 10 cm 程度にしかなりません。そのため、ススキなどが他の植物が高く成長するような草原には生育できません。三瓶山の西の原には、ススキが主体となった広い草原がありますが、現在はクロスカントリーコースの整備のため、草原の一部の草丈が低く維持され、シバ草地になっています（写真 3）。このような草丈の低い草原はアイナエの生育にはちょうど良いのでしょう。クロスカントリーコースの中でもどちらかというと端の方に多く生育しており、アイナエは踏圧に弱いのかもしれません。クロスカントリーコースの維持というレクリエーションの場としての草原の利用が、アイナエの生育を助けている点はとても面白いと思いました。

写真 1　アイナエ

写真 2　クロスカントリーコースに群生するアイナエ。白い点に見えるのはすべてアイナエの花

写真 3　三瓶山西の原のクロスカントリーコース

全国草原リレー（第 10 回）・団体リレー（第 1 回）

ネットワークの会員を中心に、持ち回りで、各地の草原を紹介するのが「草原リレー」です。第 10 回は、理事でもある公益財団法人阿蘇グリーンストックの山内氏に、第 10 回全国草原サミット・シンポジウムのその後について紹介して頂きます。

また、今回からは、団体リレーも始まります。ネットワークの加盟団体などから、その取り組みなどを紹介して頂きます。記念すべき第 1 回は、森林塾青水の前塾頭の清水氏より、森林や草原を守る「守人」を訪ねる旅について、紹介して頂きます。

阿蘇草原再生の今！　（山内康二：熊本県在住・ネットワーク理事）

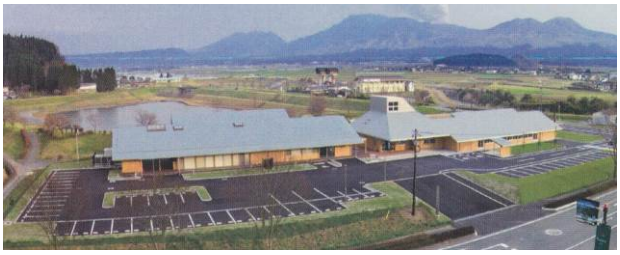
第 10 回全国草原サミット･シンポジウムから 1 年が経過し、草原再生の新たな動きに！

全国から駆けつけて頂いた 540 名の皆さんの熱気で、充実した大会となった第 10 回全国草原サミット・シンポジウムから約 1 年が経過した阿蘇では、今後の草原再生につながるいくつかの動きが現れてきています。

一つは今年 4 月完成した草原再生のための活動拠点「阿蘇草原保全活動センター」のオープンです。

オープンから約半年経過しましたが､会議や研修、視察、子どもたちの学習会、ボランティア研修、地元の人々などで連日予想以上にかなり多くの人々が利用されています。

今後さらに活動を充実させていけば、阿蘇の草原再生にとって大きな力になっていくと思われます。



二つ目は、熊本県が中心になってまとめられた「阿蘇草原保全支援システム（10 年間の財政支援システム）」がいよいよ今年度から実働が始まりました。

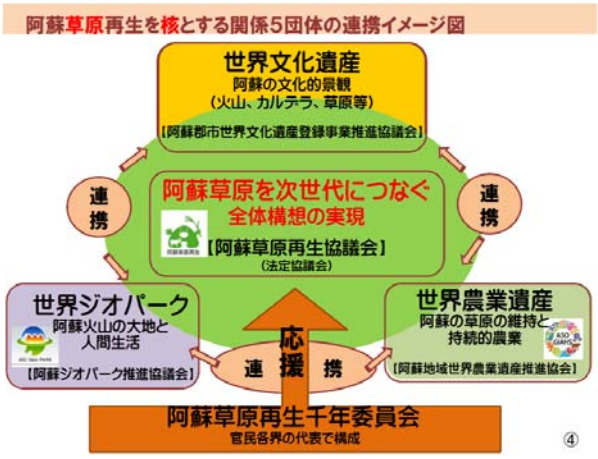
今年度は試行的運用年度として、右表のような形での国と県から 2,200 万円の財政支援が行われることになっています。来年度以降も約 10 年間はほぼ同じレベルでの財政支援が予定されています。

＜阿蘇草原保全支援システムのしくみ＞

収入（財源）　単位：千円		支出（用途）単位：千円	
阿蘇グリーンストックの会費および事業収入と募金等の収入	9,000	野焼き支援ボランティア運営	18,500
国の制度の活用（農水省の多面的機能支払制度）	10,000	野焼き再開事業	4,000
県・市町村負担	12,000	普及・啓発事業	8,500
合計	31,000	合計	31,000

三つ目は「阿蘇地域世界農業遺産推進協会」「阿蘇ジオパーク推進協議会」「阿蘇郡市世界文化遺産登録事業推進協議会」「阿蘇草原再生協議会」および「阿蘇草原再生千年委員会」の五つの団体が「阿蘇草原再生協議会」を中心として、今後連携して活動を推進していく体制が発足しました。

具体的には「阿蘇草原再生協議会」の五つの小委員会と「阿蘇地域世界農業遺産推進協会」の四つの



部会が合同で会議を行ない、活動を推進していくとともに、年２回５団体の事務局連絡会を開催していくことになっています。

四つ目は、さらにこうした動きや全国草原サミット・シンポジウム大会の影響もあり、昨年と今年にかけて五か所で野焼き再開（草原再生）の新たな動きも現れてきました。

阿蘇市	２ヶ所	約 55～75ha
高森町	２ヶ所	約 60ha
西原村	１ヶ所	約 5ha
３市町村計	５ヶ所	約 120～140ha

阿蘇では既に来春の野焼きに向けた準備＝輪地切り（防火帯づくり）作業が各地で始まっています。

阿蘇では既に８月下旬から来春の野焼きに向けた準備作業（輪地切り・輪地焼き）が始まっています。

阿蘇グリーンストックでは、３年前の野焼き事故を受けて開かれたボランティア会員総会で、活動再開にあたって下記の「ボランティア活動の基本精神」が確認されています。

また、二度と同じような事故を起さないため、毎回それぞれの牧野での活動終了時に下表のような活動の反省会を現場で行ない事故防止に努めています。

私たちは今後も「安全第一」を基本に、地元の人々と企業・行政の方々と連携し、この雄大な阿蘇の草原を未来に引き継いでいくために最善の努力を続けていきます。

(1)私達野焼き・輪地切り支援ボランティアは、**阿蘇の草原保全のため自ら進んで参加**しているボランティアである。
(2)私達は、広大な阿蘇の**草原が維持され、保全されることが私達の喜びであり、願い**である。
(3)私達は、野焼き・輪地切り支援活動は**常に身の危険と隣り合わせの活動であることを充分認識**して活動する。
(4)私達の活動に於ける最も大切なことは、**常に安全第一で「自らの身は自らで守る」**であることを確認する。
(5)私達は、常に安全性向上のための安全管理講習や各種研修に努め、**事故のない安全なボランティア活動を目指す**。
(6)私達は、阿蘇の草原維持(保全)の**主体は牧野組合などの地元住民**であり、**ボランティアはそのお手伝い・応援団**であることを確認する。
(7)私達は、今後も「**阿蘇への恩返し**」「**ボランティアをさせてもらっている**」**という感謝の想いを合い言葉**として活動していくことを確認する。
(8)私達は、以上のボランティア精神について**家族や周囲の人々に積極的に伝えていく**。

終了時の意見交換内容

牧野名	
実施月日	
リーダー名　及び　参加者数	
1　良かった事項	
2　悪かった事項	
3　リーダーにお願いしたい事項	
4　牧野にお願いしたい事項	
5　ボランティア全体に関する事項	
6　その他	

「野守」のつぶやき番外編－「守り人」を訪ねる旅始めの記－

（清水英毅：東京都在住・森林塾青水会員・上ノ原「野守」）

１．勝手に「野守」宣言！

茜さす紫野行き標野行き
　　野守は見ずや君が袖振る　「万葉集」額田王

往時、その根から紫色の染料をとるムラサキが生える野を一般市民が出入りすることを禁じ、「野守」という番人をおいていたという。聞けば、我森林塾青水のフイールド「上ノ原」にもムラサキの自生地があったという。そして、その上ノ原「入会の森」は今や、「みなかみ町のゆたかな自然と生物多様性を守るための昆虫等保護条例」の指定地。そこで、2014年４月塾長職をバトンタッチ、晴れて自由の身になったこの際、勝手ながら上ノ原の「野守」就任宣言をさせてもらった次第。

２．現代の「野守」としての「守り人」

●「守り人」って何？　森林文化協会『グリンパワー』連載に、守り人 nature21 がある。自然環境保全上、注目すべき活動を展開中の NPO、市民団体が順次紹介されている。また、日本自然保護協会では日頃より、Nacs-j の活動に賛同し支援して下さる

「自然を守る仲間」、それが会員です、としている。

万葉の時代から紫野や禁野を守る「野守」と称する「守り人」的人たちがいた。中世以降も、「山守」「木守」「水守」「防人」「堂守」など同類項の存在があった。

では、現代の「守り人」との違いは何か。彼らは、雇われの職業人、我々現代の「守り人」は自発的意思にもとずく手弁当のボランテイアが殆ど、ということだろうか。

●「守り人」仲間を訪ね絆を深める旅　フリーになって 2 年目の今秋、全国各地の守り人仲間を訪ねることにした。利根川流域だけでも十指、北海道から屋久島まで指おり数えたら 30 を越えてしまった。そこで、まず草地・畦道散歩・自然農仲間から始めることにした。

9 月 13～14 日：日光市・日光茅ボッチの会（飯村代表）
9 月 24～25 日：高島市・麻生里山センター（海老沢理事）
9 月 25～26 日：大田市・緑と水の連絡会議（高橋理事長）
9 月 26～27 日：奥出雲町・えっちゃん農園（渡部悦義さん）

日光は森林塾青水の仲間と一緒に、高島以降は川端尊師と二人旅。各地で心のこもった歓迎を受け、大いに楽しく多いに学ばさせていた。同時に、現代の「守り人」同志の心の絆を強くすることが出来た。今回は「野守」のつぶやき番外編として、前掲『グリーンパワー』誌上に登場済みの「緑と水の連絡会議」を訪問した際の学びについて、以下報告する。

３.「緑と水の連絡会議」のフイールド三瓶山麓へ

●草原にグラウンドゴルフ広場が！　9 月 26 日(土)、午前 10 時、名峰・三瓶山（標高 1,126 ㍍）の西方の山麓に位置する西の原（約 100 ㌶）の入り口付近の光景を見て驚いた。何と、大勢のお年寄りたちがグラウンドゴルフに打ち興じているではないか。放牧、採草、野焼やイバラ刈りなどくり返す内にノシバの広場が出現、それを地域住民が憩いの場として利用しているのだ。

●クロカンコースが出来て防火帯に！　眼を左の草むらに転ずると、幅広の遊歩道が左右に伸びていた。聞けば、大田市を交えた協議の末に出来た一般市民向けクロスカントリーコース。それが、野焼きの際には防火帯になっているという。これぞ一挙両得、賢い！

●広場前にはカフェ・レストランも！！　広場を走る舗装道路の対面には小洒落た食事処があった。地場産のアイスクリームが美味かった。四季折々、天候を問わず市民の皆さんの憩いの場あるいは集合場所などとして利用されているのであろう。これ又、ないものねだりだが羨ましきこと。

●市民ぐるみの外来種駆除　北方山麓に位置する北の原には県立三瓶自然館がある。周囲は、オニヤンマが遊泳する姫逃池、ノシバ広場と針広混交林からなる快適モザイク空間。問題は、この池に蔓延り在来のジュンサイを圧倒するスイレン対策。毎年 6 月、県当局や多くの市民団体の協力を得て、人力で池から引き出し根絶やしにする作業を続けているという。継続する力、動員力に学ぶべし。

●バイオマス発電で地域資源の循環的利用　大田市の一画に「ふろしき山」と称する混交林（26 ㌶）がある。2009 年の大雪で、ブナは大丈夫だったがスギはやられてしまった。そのスギ材を原料に、身近な需要先を確保した上で、いわゆる里山バイオマス発

電を行っている。放置して山が荒れないよう、豪雪被害にあった地域環境資源を有効活用するプロジェクト。我が上ノ原の隣接地にも、永らく管理放棄されているカラマツ林があるではないか。

●カヤの生産・販売システムづくりに着手　最後に注目したのはこれ。NPO 活動の恒久自主財源づくりを目指しているのだ。ミソは、地元の若手茅葺職人と組んでいること。そして、市民団体や行政とも協働しつつ農家も巻き込み、耕作放棄地の茅場化を図り草原景観の維持と新たな経済価値の創出を意図している。極めて先進的ではないか。我が上ノ原では、茅の有償買い上げの仕組みは早くに構築した。しかし、茅の刈り手の確保や茅葺職人の育成は今後の検討課題だ。

４．百聞如一見、フイールド相互訪問の勧め

以上、他の訪問先も含め学んで応用すべき材料はほとんど無限大であった。各地でご案内を頂いた皆さま方に厚くお礼言上申し上ると同時に、全国草原再生ネットワークの会員諸兄には、身近な「守り人」仲間を訪ねて相互に交流することをお勧めしたい。

2016 年 6 月、全国草原再生ネットワークは創設 10 周年を迎える。これを機に更なる高みを目指して、各地の草原の「守り人」同士が相互に交流・啓発しあう機運の醸成を期待したい。

草原をめぐる動き（2015 年 10 月～2016 年 1 月）

10/11 秋吉台お花畑プロジェクト 2（場所：山口県美祢市秋吉台、連絡先:秋吉台エコミュージアム）

10/24-25 錦秋の草原で茅刈・茅ボッチづくり（場所：群馬県みなかみ町、連絡先：森林塾青水）

10/30 夕暮れにオギを愛でる　チュウ秋特別ツアー（場所：京都府桂川河川敷、連絡先：全国カヤネズミ・ネットワーク）

11/14-15 茅ボッチ運びだしと山之口終い（場所：群馬県みなかみ町、連絡先：森林塾青水）

11/23 集まれ、乙女高原草刈りボランティア（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）

11/23 千町原 秋の草原保全活動（場所：広島県山県郡北広島町千町原、連絡先：NPO 法人西中国山地自然史研究会）

1/31 乙女高原フォーラム（場所：山梨県山梨市夢わーく山梨 3 階大集会室、連絡先：乙女高原ファンクラブ）

※上記以外もホームページで随時公開しています。

全国草原再生ネットワーク　ニュースレター　vol.24　2015 年 10 月号

全国草原再生ネットワーク事務局
〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 376-1
NPO 法人緑と水の連絡会議内　　Tel. 0854-82-2727　　Fax. 0854-84-0262

【編集後記】来年の全国草原サミット・シンポジウムの日程も決まりました。一年後、新温泉町でお目にかかれることを楽しみにしております。